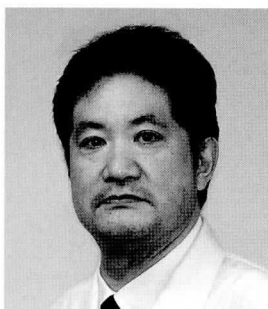


## 【新任教授寄稿】

## 就任のご挨拶

高原 幹

旭川医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座



この度、令和6年（2024年）1月1日付で、耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座の教授を拝命いたしました高原 幹と申します。当講座は1976年に初代教授海野徳二先生が開講され、本講座の礎が築かれました。その後、1998年に二代目教授として

原渕保明先生が就任され、更なる飛躍的發展を遂げました。2022年にご退官を迎えられ、三代目として私が昇任致しました。伝統ある旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座を主催していくことは身に余る光栄であり、同時にその責務の重さに身の引き締まる思いであります。

私は十勝の北海道足寄郡足寄町出身です。同年代の方であれば松山千春の出身地と言えば理解して頂けると思いますが、若い方は難しいかもしれません。ちなみに、ご挨拶をさせて頂いた際に、旭川医科大学副学長で生化学講座教授の川辺淳一先生、教育センター・地域医療教育学教授の野津 司先生が同郷であることをお教え頂き、その密度の高さに非常に驚きました。その後、函館ラサール高校を経て、旭川医科大学に16期生として1988年に入学しました。学生時代は中・高校ともに在籍した剣道部に入部し、それだけでは飽き足らずゴルフ部、合唱部にも顔を出しておりました。アルバイトも掛け持ちで行っていたため、大変充実した、忙しい学生生活を送りました。その時の仲間は今でも交流があり、各先生に本当にお世話になっております。これは、非常に大きなかけがえのない財産で、学生時代には予想していませんでした。学生の皆様も、その繋がりを大切になさって下さい。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科は当初は選択肢に入っておりましたが、剣道部の先輩が在籍されていた繋がりもあり、熱意のある勧誘を頂き、1994年に入局させて頂きまし

た。入局時は、初代の海野教授が教室を束ねられており、そのご指導により耳鼻咽喉科・頭頸部外科の多様さと奥深さに魅了され、初期大学研修から関連病院での6年間、その臨床にどっぷりと浸かりました。その後、大学勤務となりましたが、二代目の原渕教授の強力な教室運営の一環として、臨床に加え研究に関してもご指導頂きました。ありがたいことに、「鼻性NK/T細胞リンパ腫細胞のP53, N-ras,  $\beta$ -catenin遺伝子変異と予後因子の検討」というテーマにて学位を取得させて頂きましたし、2003年から2005年までEpstein-Barr virusの研究にてスウェーデンのカロリンスカ研究所に留学の機会も頂きました。スウェーデンはその風土が北海道と似通っており、さらに私の個人的な印象ではありますが、親日家が多く、素晴らしい環境のもと、研究に没頭させて頂きました。帰国後は、臨床、研究だけではなく、教育、運営、管理など様々な経験を積みさせて頂き、学ぶ機会を頂きました。これまで、私は本当に多くの良き指導者に恵まれ、その貴重な教えは現在の私の血肉となっており、様々な状況において、大きく役に立っております。ご指導頂いた先生方には感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科は文字通り、耳・鼻・口腔・咽喉頭・喉頭・唾液腺・甲状腺・頸部の広大な領域を対象としております。それらの領域は、聴覚・平衡・嗅覚・味覚・発声・呼吸・嚥下など生命の維持や質の保持に必要な多くの機能を担っております。我々はその機能障害の回避や回復を念頭に、治療を進めて行かねばなりません。そのバランスは疾患の性格により様々であり、真珠腫性中耳炎などに対する鼓室形成術においては、真珠腫摘出に加え聴力改善も要求され、当科でも積極的に目指しております。また、耳小骨奇形に対するあぶみ骨手術、重度感音性難聴に対する人工内耳手術は聴力改善が目的であり、我々も細心の注意を払い、手術に臨んでおります。その一方、頭頸部

癌手術に関しては、機能維持をあまりに優先してしまうと、切除が不十分となり再発をきたし、その生命予後に悪い影響を与えてしまいます。当科では十分な切除の後、形成外科の先生方と合同で遊離再建手術を行っており、根治切除と機能再建をなるべく両立させるよう努めております。また、上顎癌、舌根癌においては放射線科の先生方と協力し、選択的に腫瘍栄養動脈に抗癌剤を動注し、放射線治療を併用する動注化学放射線治療を取り入れ、局所制御と機能保持の両立を目指しております。また、最近では再発、転移をきたした頭頸部癌に対して、従来の抗癌剤だけではなく分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬など多くの薬剤が保険適応となり、治療選択肢が増えております。当科でも常に新しい情報を貪欲に収集し、最新の治療ができるように努力しております。上記に示した大学病院における耳鼻咽喉科・頭頸部外科において標準的な治療以外にも、内視鏡下耳科手術、内視鏡補助下甲状腺手術、内視鏡下唾石手術など先端的鏡視下手術も施行しております。特に内視鏡下甲状腺手術、内視鏡下唾石手術は保険収載前から本学に取り入れており、現在では全国でも有数の症例数を保持し、本講座の特色の1つとなっております。ありがたいことに、全道の各施設から多くの症例をご紹介頂くと同時に、関連病院や他大学の先生方が手術見学や講習希望にて研修に来て頂いております。引き続き、積極的に新しい治療法や治療技術を導入しながら地域の医療需要に答えていけるよう努力していきたいと考えております。

当科の研究テーマは、頭頸部癌の腫瘍免疫学的研究、扁桃病巣疾患の病態解明などが挙げられます。上述したように、免疫チェックポイント阻害剤の保険収載後、再発・転移頭頸部癌の治療は転換期を迎えており、「頭頸部癌の腫瘍免疫学的研究」はまさにその転換期に呼応する研究項目であると考えます。その内容はがんワクチン療法に代表される基礎的研究から免疫チェックポイント阻害剤における

臨床的研究まで幅広く、その業績が認められ、当科の熊井琢美講師は2020年に開催された第121回日本耳鼻咽喉科学会学術講演会において研究奨励賞を受賞しております。今後も当科の研究の柱として続けて参ります。扁桃病巣疾患の病態解明に関しては、私を中心となり継続して行っている研究です。扁桃病巣疾患は扁桃が原因となり掌蹠膿疱症などの皮膚疾患、IgA腎症などの腎臓疾患、胸肋鎖骨過形成症などの関節疾患が出現し、扁桃を摘出することでそれらの症状や所見が改善するという非常にユニークな疾患概念です。本疾患に対して長年蓄積した基礎的、臨床的検討の成果は、日本口腔・咽頭学会が母体となり、私が委員長を務めた「扁桃病巣疾患診療の手引き」(2023年発刊)にまとめられております。本疾患の治療は関連科の先生のご理解がないと成立しませんが、大変ありがたいことに、当大学では多数の症例をご紹介頂いており、症例数は全国でも有数です。よって、今後も研究を継続する地盤が整っており、基礎、臨床両面においてより精力的に研究を継続して参ります。本研究は私としては極めて魅力的なテーマであると考えておりますが、現在継続的に行っている他施設は世界的にも数少なく、本分野は我々が先頭に立って牽引してきたものと自負しています。また、同時に、本邦独自と言える本疾患概念の基礎的研究を絶やさないためにも、我々が地道に研究を続けていかなければならない責務も感じております。

当教室は年齢的に若いスタッフで構成されていますが、私が自慢できるやる気のある優秀なスタッフが揃っております。彼らとともに、臨床と研究にアクティビティーの高い、熱い情熱と誠意に満ちあふれた教室運営を行って参ります。今後とも、我々耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座へご指導・ご鞭撻を賜れますよう、何卒よろしくご願ひ申し上げます。